松花年

年渡をたふとくことふくことおもみ
たゆ久しくところさとし　癸
巳乃春大人五十の賀をなさんと
ぬきて松すゝきに一句を筆
毫人ゐ亭みわの年くまろひ

いにしへを猟歩三とせの毛彩
うれしけれ千代ちとに松樹の葉の
緑不朽なる株梁の枝葉
あふきてよ紙川代の寿を
祈ふる高なるを

自玄亭

歌仙

萬里庵
鶴霑

ふるさとの子に乞ふるや松の花　鳳扇
鶯ふけしらせの春美歳　羊風
春の又秋を西の金屏　沾蘭
色の濃世春きとゆめ夢　侑色
いく野色業屑ぬる迫の月　執筆
宴明鶏の かき音ら紅

ウ

幕を下こう傷ろやさむき　扇
ふれをとれば社家の門並　露
八の字にかけ蘭る縄をれ　蘭
犬を抱ふうに五月雨の中　風
ややうとてきぬくの色の家　危
見こう事こう色酒ヲ別腸　扇
はややうと乃色を大海棹　風
ふる春日　和や縄を解　危

破山の毒の方ふる松の影　露
巣ヲ鶯を鳴鷹乃詞　風
行けて為ふ同ふうき　危
月ゆ春さて乳歌を乃扇　蘭
十
夏を く晒の白をこうおし　風
呼く侍れも嫁を姫同志　露
伊達と珠数を乃法の場　蘭
裏箕に わふ見ふき　危

猿と見まち初秋乃端ゐしく　扇

蹴う葉と人の走る音　蘭

宵月光新をかたく西洞院　風

よくくきけを箔を打音　扇

意象うち地に消ての音欠　露

山くに拾て立新戸無尾　危

俳馬よる夢反る雪乃ち秋　蘭

うしろ石と寄き武庫の山風　露

ウ

取敷に秀句拾うき移軍　危

白蝶うし夢てゆる馬丈六　扇

変版乃加減の解き反答色多　露

力ち札なうし蘭養ゐる　蘭

花の香を慕ひの杉い不老門　扇

慕を乗うち重日乃新　風

賀五十初度

千代ふけて又咲そへる松の花　自玄齋　鳳扇

ちよろ〳〵と岩根つつ松の色　仙雲臺　羊風

根つよさよ岩根の松の花　集螢子　侑色

松杉に流るゝ水の清るこゝろ　玉樹階　沾蘭

五十九番酒合
賀　一番左

五百枝さしかはしやまつの緑色深くこそ見
十ゑうへつるかずやゑまの初こそ見

了因
不羨

知命の御賀せさせたまふ

松山やうけひかれしたる幾代
今年よりゑまの初日松

存義
買明

五十雙賀の金屏や松鶴子
鶴島みなを本姿やまの色

樓川
百萬

色ふかし立松をれ法華集
法華風を賀しやゑまの緑

雞口
祇丞

やよ実を五葉の君の松の色

温克

御五十をことふくしやまの松の葉

田女

初子ゑやゑまの子川の色

可因

松ゑくやゑまをうけて五十年

宗梅

こゝろをたつ小松のうちやまの寿の葉

蓼足

御鶴子みを松ゑ鶴やゑまの組

白頭

歌仙

松ノ枝突セク君ヤ為ラマシ　常仙

鶯ヲ蔭ノタヲリ折庭　葵足

鄙ヲ頃ト宮一度燥ヲク　存義

ヒ折ふる白代也ラ雪　宗梅

文ヲ遠ク春ノ日　可因

くしやいまいまの初沙　義

ウ

敷ラ敷く朱蒲塞拂ラ墨ノ神　足

一数ヲ むる僕ノ年　仙

仕合ヲ鼻ノ為ヲ中ヲ変　梅

数ノ涼ノ　雷　因

ハヤラヤ君ヲ長ノ女子ヲ　義

春ヲ外ラ伽羅ヲ出ヲ　足

子ヲ数ラク神ハ数ノ命　因

紙帳ノ履ラ出ノ徹ノ大德　義

降うけむ雪しをやそ歳の日　仙

火を焚たてゝ無ゐ炉なる　梅

貫之の頭を立ちゐて花鎧　足

も着けらゝ年神の柄　因

十

ちるもみぢ葉の扇をかざすら　義

思ひこめけく酔ふ日のうち　仙

濃かなる色みは高き大江山　因

ほゝまれく栗の毒ちる　足

百合の葉のいつゝ風塩くぶ　梅

一巻あるか京良の商人　義

島中蔚蔚たるあゝ糟　仙

かうばいふみをたゞぬ蕭太　因

起るゝ霞をまくる濃くの袴掛　義

あゝ消してを見れば泊瀬　梅

怪相掃けと弱るいろなき色の雲　足

塔けゝ多宝堰の自然歌　仙

ウ

日事は警固公事の中雲り　梅

矣い多葵粉を和尚もそ　義

猫ゑもゐ有雀き　仙

浦乃浦まく世を志川う　足

くるくしく稚くうたふ花の人　義

国色よりややひ泳を　因

常仙 七句　宗梅 六句

葵足 七句　可因 七句

存義 九句

とゝこゆるきりいろみ御賀を

松雲花ある志とそくよせく祝し

あゝ玉ゐ蓑ある句を集めと

ゐしこきあゐせ鶴かゐると

元とゝ　やゝれはくあゐ

よろこぼひの道乃栞

きのしたせの怪し常盤

紫ぢいのうらく松花集と名

付くるこころざしの事

過來菴常仙